

Best Practice



Rika Suda

千葉大学大学院医学研究科呼吸器内科学
須田 理香

呼吸器内科医の視点で 肺高血圧症診療に臨む

一肺高血圧症(PH)診療に取り組むようになった経緯について教えてください。

医学を志していた学生の頃、漠然と進みたいと考えていた領域は肺高血圧症(pulmonary hypertension: PH)ではなく、がんの緩和ケアでした。祖父が胃がんで亡くなり、医学生になって出会った本の影響から「人間的な最期を迎えられる医療現場に携わりたい」と思うようになりました。まずは全般的ながん治療を学ぶため、慢性閉塞性肺疾患(chronic obstructive pulmonary disease: COPD)からアレルギー性疾患、間質性肺炎、肺がんなど疾患の幅が極めて広く、内科の基礎知識を身につけながら腫瘍内科学についても学べそうな呼吸器内科を選択したのです。

2005年に医学部を卒業し、呼吸器専門医取得を目指していた2000年代後半から、肺動脈性肺高血圧症(pulmonary arterial hypertension: PAH)に対する経口の肺血管拡張薬が次々に登場しはじめました。2010年頃には各地で勉強会が開催されるようになり、勉強会に参加している先生方が「この新しい薬をどう使ったら患者さんがよくなるか」と熱心に議論されている姿を目の当たりにし、「なんて魅力的な領域だろう」と感じたのです。かつては有効な治療法がなく、若い患者さんが発症から数年で亡くなっ

肺高血圧症患者さんの QOL向上を目指して